

カウンセリングのお作法 第40回

CON

Counseling Office Nakajima

カウンセリングオフィス中島 中島(水鳥)弘美

～学校と外部相談機関の関係性～



前回は、家族カウンセリングの関係機関である、病院などの医療機関や学校との連携について話しました。

今回は、そのなかの学校と外部相談機関との関係性について話します。

私立高校生の不登校

現在、公立小中高等学校の多くは、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなど専門の相談支援担当者がいて、児童生徒が安心して学べるようにサポートをしています。一方、私立学校のなかには、教育相談担当という位置づけで、教員が担当しているところもあります。カウンセラーの配置はかなり進んでいるものの、専門職の相談員がいるとは限りません。そのような場合は、学校が外部の専門相談機関を紹介することがあります。

たとえば、私立高校一年生の生徒さんが不登校状態になった場合を考えてみましょう。

欠席が長期化し、クラス担任や学校側がアプローチしても、何も変化がみられない状態に陥ることがあります。保護者と連絡はとれるものの、本人に会うことができず、学校関係者がかかわること自体が生徒さんにとって、大きな負担になるような状況です。

生徒さんの保護者の方々が、独自に相談機関を調べて利用をする場合もありますが、学校関係者が専門的な支援が必要であると判断した場合は、外部の相談機関をすすめる場合があります。

中立的な立場で生徒家族支援

長期にわたり欠席が続くと単位取得ができなくなるつまり、留年になる可能性が出てきます。そのため、今後の進路に関して、本人の意思表示、決断が必要です。

欠席している生徒さんにとって、この決断は大仕事です。再登校ができず、欠席を続けると本人の意思にかかわらず、留年になり、来年度ひとつ下の学年でもう一度やりなおすことになります。

学校側から原級留め置きであると明言される前に転校をするなど、限られた時間のなかで、そのほかの選択を考える必要があります。

しばらく休憩をとってもう一度同じ学年を続ける、異なる学校に転校する、再度高校を受験し直す、就職する、あるいはそのほかの進路の選択を何か選ばなければなりません。

在籍している学校にはもどらず、別の学校に転校したいような希望がある場合、どうしても留年だけはしたくないとの希望があるような場合は、学校内のスクールカウンセラーには話しづらいと本人や保護者が考える傾向がありますが、外部相談機関であれば、中立の立場で支援をし、本人のあらたな進路をともに考えてゆくことができます。

在籍している高校そのものについて無理を感じるのか、留年することが耐えられないのか、人とかかわりがむずかしいのか、勉強そのものに限界を感じるのか、さまざまな要素が絡み合うなかで、何を希望するのか、少なくとも避けたいことはなにか、家族とともに今後希望する道を描いてゆくための支援を行います。

これからの進路を家族で話し合い、道を選択して、新しい環境に慣れるまでの支援も継続して行います。

その流れのなかで、通信制の学校などに転校した場合は、新しい学校と相談機関との連携を行い、チームとして生徒さん家族を支援し、前の高校への経過報告もおこないます。

長期にわたるゆっくり支援

関係機関と協力して支援をする部分もありますが、外部の独立した相談機関の特徴として、長期にわたるゆっくりペースの支援があげられます。

校内のスクールカウンセラーは在学中のカウンセリング等が中心になり、生徒さんが卒業後、あるいは退学、転校して、高校に在籍しなくなると、相談支援をする対象でなくなります。しかし外部の独立した相談機関であれば、ご本人と家族が希望する限り、支援の対象となります。

大学生、社会人になってからも支援

大学に進学したあと、あるいは、卒業後、社会人になってからも、節目節目で経過報告のために、来所されることもよくあります。

大学入学など環境に大きな変化があったときは、大学合格の報告とともに、学生生活についてもいろいろとお話を聴かせていただき、就職先が決まりどのような仕事なのか、期待や不安も含めて、いろいろ語られます。

大きな問題に行き詰っているわけではないけれど、ちょっと話を聴いてほしいと、不安解消のために来所されることもよくあります。それはまるで予防カウンセリングのようなものであると考え、気軽に話していただける存在になっているようです。

もちろん、社会人なりの深刻な相談もあります。

就職先でトラブルになったので、またカウンセリングに通いたいと予約が入ることがあります。結婚後の自分自身の家族、子どもさんに関してのカウンセリング希望もあり、長きにわたるお互いの信頼関係をもとに、ともに今後の方向性を考えていくことになります。

家庭医のようなホームカウンセラー

さらにこれまでのクライアントさん以外、つまり別の家族が問題を抱えているので、そのことを相談したいと、来所されることがあります。別のきょうだい、あるいは親御さんにまつわる支援などです。

家族は、家族のライフサイクルに応じて課題があり、そのステージの変化に応じて支援が必要な場合があります。

子どもさんが高校生のときからの長いかかわりのなかで、保護者の方を含めた家族全体を知り、理解していることが多いため、まるでかかりつけの医師のように、ホームカウンセラーをさせていただいています。